

■おきなわ環境ネット■

沖縄環境ネットワーク通信 21 号

*Okinawa is a
silent
battlefield ..*



沖縄を去るにあたって
環境ネット入門 ～壱岐 一郎～

… 宇井 純

～速報：軍事活動と環境に関する第一回国際ワークショップ～
国際ワークショップとイラク戦争
基地視察同行レポート

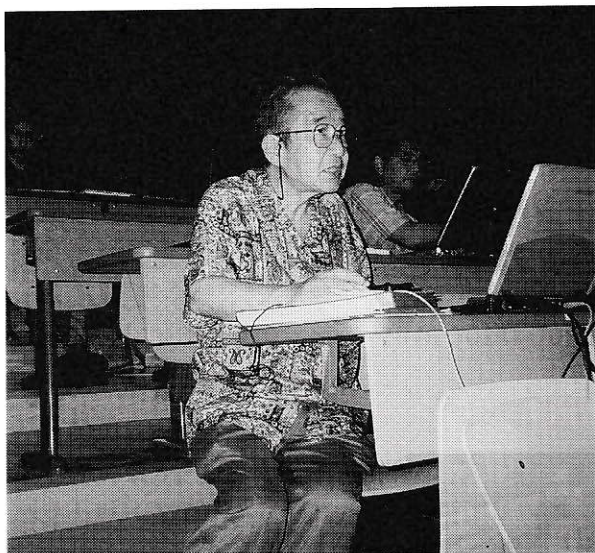
… 砂川 かおり
… 真喜志 好一

新石垣空港建設の方法書が公告縦覧される
泡瀬・諫早・セマングム 東アジアの湿地が危ない！
塩屋湾外海埋立て問題の現状

… 内海 正三
… 水間 八重
… 儀保 昇

エコネット
《環境情報おきなわ》

沖縄を去るにあたって 宇井 純



沖縄での 16 年間は、目の前にことに追われていくうちに一瞬にして過ぎた。

着任翌日から新石垣空港の白保海上案をめぐる環境論争に巻き込まれ、沖縄を去るいま、同じ空港のカラ岳陸上案に対する意見書を書いているという皮肉な巡り合わせになって、この間さっぱり進歩していないというのが、沖縄側に対しても、私自身に対しても同じ感想になる。この問題をめぐって県庁の土建部と対立すると、沖縄県のすべての部門から敵と見なされて一切意見を聞かれないという、愚鈍にして怠惰な二分法の中へ放り込まれた。敵か味方か、白か黒か、右か左か、保守か革新かと分けてしまい、味方なら頼りにするし、敵ならば相手にしないというやり方は、基地問題などではそれでよいかもしれないが、環境問題はもっと複雑である。背景を明らかにして、問題がその中でどのあたりにあり、そこに存在する特別な条件は何かというように、段階的に解きほぐしていかないと、解決への手がかりがつかめない。それは元来が知的に怠惰な二分法では無理な性質を持っている。

米軍基地を沖縄に集中的に押し付けておく口止め料として、高率補助を伴う公共事業が台風のように沖縄に注ぎこまれる。その大部分は中央官庁の机上で作られた案であるから、別に悪意はなくとも、沖縄の亜熱帯のもろい自然に対しては破壊的であり、土をとめどなく流してしまう土地改良事業、いたずらに工法をてらった道路や橋梁、浪費的で借金の山を作る下水道などが歯止めなく作られる。

その結果、沖縄の島を取り巻くサンゴ礁の 90～95%は死んでしまったと観察者は言う。新石垣空港の経過に典型的に見られたように、大学教授たちは巨大な開発主体であり若干は研究費も出してくれる県や国の行政には何も言わないどころか、委員会・審議会などでは行政の走狗になっていた。その結集として、沖縄の自然環境の現実に関する研究は停滞し、たまに行われる調査などでも、金の出所に対してははっきりモノを言えない風習ができた。

沖縄に関係する官僚機構は長年補助金漬けにされて、政策の優先順位を補助率の高いものからやってゆくような、現実無視の姿勢がしみついてしまうから、一般的に頭が高い上に不勉強である。一生懸命に説明して、2～3年してようやく基本的なことがわかると転勤で、始めからやり直さなければならぬ。公開されているはずの審議会の日程を尋ねたら、あなただけに教えると不公平になるから答えないと言ったのけた課長がどんどん出世するし、人の前では意見が言えないからと会議を非公開にした琉球大学の教授がいたほどである。

日本中歩いて、府県という中間自治体は一般に自治意識が低くて問題になるが、その中でも沖縄県の環境行政はやる気のなさで日本最低の水準にあると言っているだろう。この水準の低さが新石垣空港の場合には推進派の足を引っ張ったことは否定できない。

しかし沖縄の環境の立場に立てば、この低水準を笑ってばかりもいられない。いろいろな機会に手伝おうとしたが、例の二分法で相手にされなかった。むしろ下水処理水の再利用のように、提案したことの逆が公共事業になるからという理由で採用されることが多く、モノを言う気力も失くすようなことがあった。96年以来、沖縄環境ネットワークができて、その組織を背負って発言をするようになって、マスコミなどの態度は若干好転したが、行政の姿勢は改善したとは言えない。2000年の沖縄サミット以降は、沖縄環境ネットワークにもいくつかの実績ができたし、組織として政策面で発言をしていくことを考えるべきであろう。いまの沖縄で事務局員を常勤で置いて活動しているところは他にほとんどない現状なのだから、政策を実現するという次元で勝負すべきなのだろう。県の審議会や委員会にも人を送りこみ、

よどんだ空気を吹き飛ばす必要がある。

沖縄に来て間もなく相談を受けたブローラー農場の排水処理は、最も原始的な土の素掘りの池という形で実現し、大変楽しみだったこれは豚に比べて数倍難しいが、どうやら処理したものを農業で堆肥としても利用することにほぼ成功したと見てよいようである。その結果の一部は土木学会や下水道協会研究発表会に報告した。

こうして沖縄環境ネットワークの仕事として出発した雄樋川浄化作戦は具体化の方向に展開している。この点では私は沖縄に対する一宿一飯の義理は果たしたと言えようか。

16年間を振り返れば、沖縄の山河や海に対して果たすべき責任は半ばまで達しただろうか、誠に心もとないものがあるが、沖縄環境ネットワークの定着に後事を託して思いを断つ時なのであろう。

※宇井先生のご退任に際し、同じく今年度で沖縄大学を退任される壺岐一郎氏より原稿をいただきました。壺岐さんは長年テレビプロデューサーとして活躍され、沖縄大学では主にマスメディア論・映像文化論を担当されていました。

環境ネット入門

沖縄で宇井さんに汚水処理の現場説明をしてもらったことがあるので、沖縄大学非常勤講師のころ「沖縄環境ネットワーク」に加入した。

本年一月、宇井さんの沖大での最終講義を聞いて、特に感銘を受けた箇所があった。それは、高校などの化学実験を設置する予算は通常 2000 万円、80 年代の沖大は 500 万円しかなかったので失望しかけたが、「アジアではその 500 万円が相場だ」と気を取り直した、と淡々と語ったところである。

その後、執念の結晶として豚舎排水などが安価で処理できる「宇井システム」とも言えるものを完成させ、牛舎でも使える可能性を示唆した。

映像メディアや日中古代関係を専門とする私などは、宇井さんの実学分野での貢献に頭が下がる。

70 代の私は沖縄を去っていくが、終生、環境と平和、人権問題に、畳の目ひとつほどでも役立ちたいと考えている。(壺岐 一郎)

●宇井先生の沖縄での業績をまとめたハンドブックが出版されます。

「沖縄に清う水を(仮題)」

～宇井純先生の沖縄への置き土産～
6 月初旬出版予定

沖縄の海にそそぎ込む赤い水、黒い水…
黒い水(畜産排水)を浄化して畑の肥料にするマニュアルです。

この一冊で・あなたも豚舎排水の浄化槽を作れます。

A5 版 40 頁予定

編集・発行／沖縄環境ネットワーク
(次号でも詳しくご案内する予定です)

* * *

●宇井先生の蔵書が埼玉大学に

宇井先生のご蔵書のうち、市民運動関係の資料が、埼玉大学共生社会研究センターに寄贈されることになりました。関心のある方は下記までお問合せ下さい。

埼玉大学共生社会研究センター

TEL048-858-3090 FAX048-858-3115

ホームページ

<http://www.kyousei.iron.saitama-u.ac.jp/>

* * *

●事務局からのお願い●

沖縄環境ネットワークの創設メンバーであり世話人でもあった宇井純先生が、3 月末で沖縄大学を退任されました。4 月いっぱいには沖縄で荷物の整理にあたられ、5 月初旬に本土にお帰りになる予定です。これに伴い、沖縄環境ネットワークの世話人も退かれ、今後は顧問という形で会を支えていただくこととなります。

宇井先生の意味を継いで、沖縄環境ネットワークは今後も沖縄の環境問題の情報センターとなるべく、その責務を果たしていきたいと考えています。今後とも会員の皆様のご協力をお願い申し上げます。

去る3月19日から23日まで、那覇市の沖縄大学において「軍事活動と環境に関する第一回国際ワークショップ」が開催された。「戦争（軍事活動）は最大の環境破壊！」というこの公然の事実について、フィリピン、韓国、ベトナム、アメリカ、日本の参加者各々の経験を共有し、出来るだけ科学的に、論理的にお互いの理解を深め、現在私たちが直面しているこの種のさまざまな問題について新たな解決策を見出そうとしたこの試みの詳細は次号でお伝えするが、今号では、沖縄側の責任者であった砂川かおり氏の印象記と、基地視察に同行した真喜志好一氏のレポートをお届けする。（編集部）

国際ワークショップとイラク戦争

砂川かおり（沖縄環境ネットワーク世話人）

ワークショップの公式日程の初日に米国と英国の軍隊がイラクに対して攻撃を始めた。イラク攻撃の始まったその日の午後のセッションでは在沖海兵隊の環境部が、有害廃棄物処理と自然環境保全の取り組みについて報告することになっていた。戦争を始めたアメリカ軍と仲良く（？）会議をしている私たちの活動は、沖縄の人々の目にどのように映るのだろうか？ 複雑な気持ちを抱えたまま会議は進んでいった。

以前、ある勉強会の中で私は「平和運動や環境運動の中で多様な活動を認めて欲しい」と話したことがある。平和や環境に関するスローガンの運動よりも、政策提言を行うための地道な調査などが今の時代にはより大切な活動だと考えている。その際には当然、当事者である米軍からの情報はとても有効であり、フィリピンの参加者からもその点が指摘された（但し、イラク攻撃が開始されたその日のワークショップの終わりに、参加者たちは「アメリカ、イギリス両軍等によるイラク攻撃の即時中止を求める緊急決議」採択した）。

今回のワークショップでは、本当に多様な視点から多くの有益な報告と議論が展開されたが、不幸にもタイムリーだったのが、米国の環境 NGO「アーク・エコロジー」の代表であるソウル・ブルーム氏による「今回のイラク戦争で予測される環境影響評価」であった。1999 年の湾岸戦争の経験を基にしたこの報告において指摘されたのは以下の点である。

- ① 数千の人々が、炎上する油田の煙、爆弾、劣化ウラン弾などから生じる汚染物質や、不発弾による致命的で長期的な健康被害を受け、死傷するだろう。
- ② 工場、軍事施設などの爆破によって生じる有害汚染物質などによって、ほぼ米国テキサス州に匹敵する地域が汚染されるだろう。
- ③ 戦争後おそらく数年は（イラクの農業生産が落ち込むことによって食料は）、さらに輸入農産物に依存しかねない。
- ④ ペルシャ湾に流れ込む油の量は、1991 年の規模を超えかねない。
- ⑤ 油田の炎上はペルシャ湾、場合によっては東アジアの天気や環境に影響を与えかねない。

ブルーム氏の発表はとても具体的で、戦争による環境への影響を理解するのに非常に役に立つものであった。ブルーム氏が予測した環境影響が、現在、国連機関でも議論され始めている。

国連環境計画は3月30日、イラクの戦争で炎上した油田の煙は1991年の湾岸戦争時ほどではないとしながら

も、油田の煙には硫黄・水銀・ダイオキシンなどの汚染物質が含まれており、この煙が居住地域を脅かし続けていると発表した。また、水質悪化によるシャット・アル・アラブ河口のプランクトンの大量発生についても警鐘を鳴らしているほか、石油化学施設や有害化学物質の工場や倉庫の破壊などが危険をもたらす可能性があるとも述べている。

さらに4月6日、国連環境計画はイラクにおいて劣化ウラン弾の環境影響調査を実施することを他の国連機関に奨励した。国連環境計画のトップファー事務局長は、戦争による急速な環境への損害に対する回復活動は人道救済（事業）に役立つ。そして、長期的なイラクの人々の福利を考える時、将来の復興プログラムに環境対策を組み入れることが不可欠だと述べている。実際に、戦争後の環境回復プログラムは、今後6ヶ月にわたるイラクと隣国の国々への緊急援助の一つとして行われる予定である。

湾岸戦争時のイラクのクウェート侵攻によって生じた賠償要求を処理し補償金を支払う目的で、1999年に国連安全保障理事会の下部組織として設立された「国連補償委員会(UNCC)」には、環境損害への賠償委員会が設置され、国連環境計画によって影響地域の環境監視や環境影響評価事業の進行状況や結果が報告されることになっている。

このように国際社会では、戦争による環境への影響に対してその実態を調査し、イラクには湾岸戦争時の環境損害に対して補償を行わせるなどの政策をとっている。このような国連の活動を通して見えてくることは、戦争、そして軍事活動によってもたらされる環境破壊や汚染への対応は、NGOだけでなく関係政府や国際機関の取り組みべき重要な課題になっているということである。もちろん、大国の軍事活動によってもたらされる環境破壊や汚染については、当事国に明確な責任を求める国際的な政策は作られていない。だからこそ、軍事基地駐留地域や戦場跡地の住民・NGO・研究者たちが、その環境破壊や汚染の実態を明らかにし、この問題について関係政府や国際機関へ適切な政策を作らせて対策をとらせることが重要となってくる。戦争行為からもたらされる環境破壊や汚染について、その当事者たちが責任を取る仕組みがつくられれば、戦争行為が安価な外交手段として用いられることは少なくなるだろう。

沖縄で開かれた国際ワークショップというささやかな取り組みが、環境保全の立場から、戦争を抑止し、軍事活動を減らしていく、反戦と軍縮の継続的活動に繋がっていくことを心から願っている。

米軍基地をめぐる一日

現地視察責任者 真喜志好一

3月19日午前8時50分、海外からの参加者の宿泊先である那覇市の「ホテルサンワ」からの出発を前に、砂川かおりさんから朝の挨拶。案内人は沖縄平和ネットワークの代表世話人である大城保英さん、通訳に大城 康さん。初対面なので名札をつけてもらい、全員の短い自己紹介。ベトナムからのボー・キ教授、フィリピンからコラソン弁護士、オローラさん、アメリカからニーナさん、ピーターさん。日本環境会議から大島さん、除本さんや学生。それに在沖海兵隊環境部からの3名に沖縄からの参加者を含めて30名ほど。空席にメディアが数人。実行委員会からは学生2人と大城順子さんに私。事務局の酒井さんは弁当とカメラを持ち込んで見送り役。定刻9時にホテルを出発。

浦添軍港と辺野古海上建設の長期計画

先ず那覇軍港を対岸から見る。水深が浅くて無用の長物になっていること等を大城さんが説明。浦添市の「キャンプキンザー」沖の軍港建設の予定地へ。1966年に米軍が作製した軍港計画図を示しながら、沖縄本島中南部の海岸線でのなかで、サンゴ礁の自然海岸が残されている海域であることを話しながらサンゴ礁の写真を見せる。

宜野湾市の「嘉数高台」で、大城さんが普天間飛行場の沿革などを説明。輸送機が着陸する体勢から滑走路すれすれにそのまま上昇する「タッチ・アンド・ゴー」をくり返した。話もしばしば中断。大城さんによると、「タッチ・アンド・ゴー」は着陸と離陸の操縦を一度に習熟するための日常的な訓練だという。

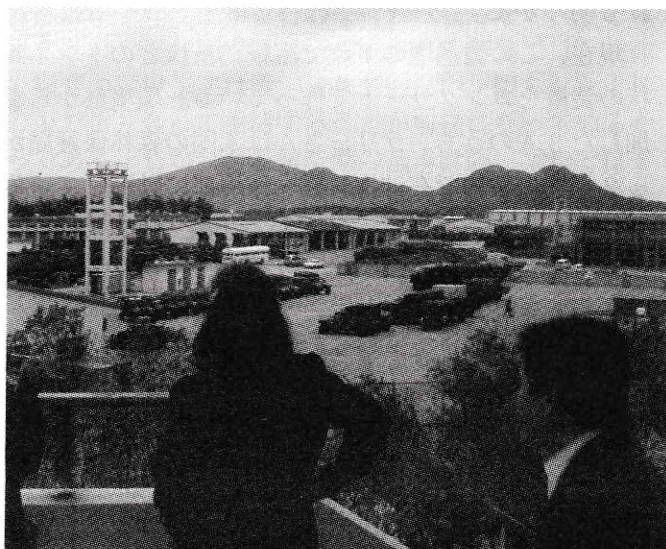
辺野古沖に海上基地を作る米海兵隊の1966年の図面、その滑走路の方位を踏襲した1997年の国防総省の最終報告を見せた。1966年に計画された滑走路の長さは3000m、1997年の国防総省の最終報告では1500m、現在の計画は2500mである。当初の計画に近づいているのだ。

日米両政府が、「市街地の中心にあり危険な普天間を返還し、その代替基地を建設する」と説明しているのは、米軍の長期計画を隠していることを強調した。ボー・キ教授らにテレビ局からインタビューの申し入れがあり5分ほどを割く。

嘉手納からキャンプ・ハンセンへ

続いて嘉手納町の「安保が見える丘」。大城さんの「爆撃機B52がベトナムに向けて飛び立った。私たち沖縄の人々はベトナム戦争への反対運動をした。」との話を聞き入るボー・キ教授。

高速で伊芸サービスエリアへ。お昼前に那覇空港に到着した二人が合流。昼食後、金武町の体育館の踊り場から「キャンプ・ハンセン」を見下ろし、実弾射撃演習のため禿げ山になり赤土の地肌がむき出しになったブーツ岳を見る。因みに、打ち込まれた砲弾の不発弾は、地表から4~5m程もぐり込んでおり、除去作業が困難であることが、後日のワークショップの質疑で明らかになった。



禿げ山になったブーツ岳

海兵隊の赤土流出対策と日本政府の対策

「米軍基地から赤土が流れ出してサンゴ礁の海が死んでいる。」との大城さんの説明の後、在沖海兵隊・環境部の一人が、彼らがとっている赤土流出対策を説明させて欲しいという。

「赤土は軽くて水に浮くようにして流れるので、山肌に草の種子を吹き付けて流出を止めている。一つの川の流域に海兵隊の訓練場だけではなく、民間のゴルフ場があったり、畑を開発したりといくつかの赤土流出源がある。私たちとしては沖縄の皆さんと協力して赤土流出を防ぎたいと考えている。」とのこと。私は提案した。

「海兵隊が発生源で流出対策をしていることは正しいだろう。沖縄では日本政府のマニュアルに従って、沢に赤土を濾過する堰や、コンクリートの砂防ダムなどを作っている。その対策は小動物の行き来を妨げるだけで赤土流出対策には役に立たない。5分ほど寄り道してその現場を見に行きませんか？」

宜野座村松田から国道329号線を北上する。流入した赤土が海水の「ニガリ」と結合して沈殿し、真っ赤になった潟原。国道沿いに、浜から水陸両用戦車が上がるコンクリートの斜路、いわゆる戦車道もある。潟原に注ぎ込む慶武原川を越えてすぐに左折。工事用の仮設道路でバスを降りて川沿いに2〜3分歩くと石と砂利で作られた濾過堰がある。日本政府が作った対策マニュアルでは赤土を濾過する役割を果たすという。写真では分かりにくい、堰の上流（右）側は下流側よりも水位が高い。石、砂利の間に砂や赤土が詰まってもはや濾過の役割を果たしていない。それは誰の目にも明らかだ。

現在、この濾過堰の下流で縦横3mほどのトンネル状の装置をコンクリートで作っている。環境部から参加した3人のうち、ラリーさんは米国の森林保護局から2年間の契約で在沖海兵隊・環境部に勤務しているのだという。そのラリーさんが不思議そうに問う。

「マキシさん、これはどういう役割をするのですか？」

「分かりませんねえ。」

「他のところも見せて下さい。一緒に赤土を止めましょう。」

軍人とか軍属の顔ではなく、科学者の顔で提案し、握手を求めてきた。

辺野古の海と「命を守る会」



「命を守る会」事務所にて。手前は島袋ヨシさん奥に金城祐治さん、左の前屈みがボー・キ教授

那覇市の東海岸・辺野古の海を見下ろし、「キャンプ・シュワブ」が見渡せる豊原の高台で下車。大城さんが埋立ての規模やジュゴンの餌になる海草があることなどを説明。そこでは海兵隊側からの発言はなく、透明な海を背景に集合写真。

辺野古の「命を守る会」事務所をはば予定の時間に訪問。90過ぎて最長老の島袋ヨシさんはじめ数人のオーバーたちと金城祐治代表、事務の富田晋くんが待っていた。

祐治さんは、「辺野古は、三方を米軍基地に囲まれて暮らしています。海まで基地に奪われるわけにはいきません。海上基地への賛否で、辺野古の住民が二分されてしまいました。海上基地建設を断念させて穏やかな暮らしを取り戻したい。皆さんのお力も貸して下さい。」と丁寧なあいさつ。

まだ十代の晋くんは、「辺野古のオーバーたちに僕は成長させてもらいました。工事が始まるとオーバーたちは海に入って止めるとおっしゃっています。僕はオーバーたちにそうはさせたくない」と。

最長老のヨシさんは、「この海の魚や海草のおかげで、私たちは何もない時代を生き延びてきました。（この海に基地を作るといふ）アメリカは嫌いです」（カッコ内は筆者が補足した）。国際ワークショップの参加者を代表してボー・キ教授から連帯と激励のあいさつ。

砂浜に出ると、金網で隔てられたキャンプ・シュワブ側には顔の判別がつかない程の距離に10名ほどの海兵隊員の姿。浜にはジュゴンの餌の一つ、リュウキュウアマモがうち寄せられていた。予定より30分ほど遅れて沖大に到着した。



役に立たない濾過堰

新石垣空港建設の方法書が公告縦覧される

内海正三（沖縄環境ネットワーク世話人）

環境影響評価法に基づく方法書の公告縦覧が、突然2002年12月24日に沖縄県庁と石垣市の4ヶ所で始まった。縦覧期間は2003年1月29日までで、意見書の提出は2月12日までであった。環境影響評価法では広く専門家や国民一般の意見書を認めており、そのためには最低でも東京都の沖縄県事務所には必要である。アメリカでは関連する主だったNGOにはコピーが配布されるのが常で、石垣以外では県庁1ヶ所というのは、できるだけ早い段階での環境配慮を求める法が精神が生かされていない。専門家には沖縄県まで来て見ろとでもいうのであろうか。

沖縄環境ネットワークと那覇の白保の海と暮らしを守る会が県庁に縦覧に行き、新石垣空港建設対策室にコピーを要求したが返答がないまま期日を迎えた。止むなく自費でコピーを作り全国の専門家に送付した。最終的には全国から500通の意見書が寄せられた。沖縄環境ネットワークが把握している意見書の主な内容は、事前調査で多くの予算を使い方法書が形骸化している、赤土流出のサンゴ礁への影響が把握できる調査計画になっていない、地域の生態系の把握が不十分で通り一遍の調査しか計画してなく亜熱帯の特性が理解されていない、現空港拡張案を代替案として検討すべき等であった。沖縄環境ネットワークとしても環境NGOとして意見書を提出した。長いので引用はできないがインターネットで配信できるので事務局まで連絡して欲しい。

方法書の公告縦覧に一部重なる形で1月21日から2月20日まで新石垣空港に関する整備基本計画（案）が公表された。それに対する意見書の提出は3月6日までである。方法書が公告縦覧されてからなぜ基本計画案が公表されるのか。順序が逆で、国土交通省の求めるPI（パブリック・インボルブメント）の手続きをアリバイ的に進めているに過ぎない。すなわち、地域住民の意見が反映された空港計画でなければならないので、追っかけて基本計画（案）を公表したのである。沖縄県のホームページにも記載されているので一読されたい。

環境への影響では、「位置選定委員会の提言で白保海域の良好な自然環境を保全するため、新空港の建設位置をできるだけ海岸域に近づけないよう検討するとともに、環境検討委員会や工法検討委員会を設置して、工事中の赤土流出防止対策を十分に講じる等の条件が付された」と書いてある。海岸の保安林に食い込む設計は限りなく海岸域に近い。赤土流出対策も後述のようにあいまいな形で推移している。

将来の需要予想でも、乗降客数が2001年の143万人が2011年には188万人に、2016年には224万人、そして2021年には260万人に増加となっている。取扱貨物量でも2001年には1万トンが2011年に1.1万トン、2016年には1.2万トン、2021年には1.3万

トンと増えている。日本の総人口が見通しが甘いと多数の学者から批判されている国立社会保障・人口問題研究所の計算でも、2004年にピークを迎え、その後は減少の一途を辿ることになっている。何度も予想修正を繰り返す国立社会保障・人口問題研究所よりも信頼が有るアトラクターズ・ラボの予想では、何と2100年には日本の総人口は3554万人まで減少予想されている。

減りつづける人口の中で、政府発表の超楽観的な平成7年を基準にしたプラスGDP予想に従って増加計算した数値である。ほとんどが国内客の石垣空港の乗降客が、人口減少社会で大きく増える道理がない。ほとんどペテンの世界である。

騒音コンター図や騒音データを見ると、平成13年度の70デシベル以上の騒音の1日平均累積時間は4分18秒から7分23秒である。1日の内、最も多い場所でも8分以内で収まっている。巨大開発で大規模な自然破壊を伴う工事を行わなければならない程度とは思えない。飛行場建設場所の限られる離島では、法律で騒音の環境基準は設定されていない。限られた土地の中で折り合って生活することが前提になっているからである。しかし新石垣空港の基本計画（案）ではその断りが無い。沖縄県が勝手に付けた仮想環境基準を科学的な装いで使い、それを超えている数値を赤字で示し、あたかも法律違反の状態の騒音地区が有るように表示している。飛行場の周辺に人家が増え、うるさいからと移設を要求すれば、豊かな自然環境はなくなってしまう。

2月17日に那覇市で開かれた新石垣空港建設工法・環境両検討委員会意見交換会も時期を失している。方法書作成以前に両検討委員会の意見交換会を行うべきで、今更何をしたいのか分からない。内容も、2002年9月25日の第4回工法検討委員会で示された機械処理脱水方式が提示されず、具体的な赤土汚染の流出防止対策が削除されて基本方針が示されている。議論が後戻りしていて果たして工法検討委員会の先生方は工法に自信がないのかと訝ってしまう。

注：PI（パブリック・インボルブメント）とは、今までの公共事業ばら撒きによる空港整備計画では、建設段階で反対運動が起こり事業が進まなくなる怖れがあるため、地元住民の意見を反映した空港整備計画を地方自治体が立案し、国に補助申請を提出し、採択基準に基づいて国が事業採択するシステムを言う。これが内実の伴う制度となるには、行政の情報公開と住民の参加・責任意識が重要となる。

現在の沖縄県のような情報操作を行うお上意識の下では、以前のシステムと大差無い結果に終わる危険性も有る。具体的なプロセスは国土交通省から示され、来年度にも実施される見込みである。

泡瀬・諫早・セマングム。東アジアの湿地が危ない！

～「国際湿地シンポジウム」に参加して～

水間八重（泡瀬の干潟で遊ぶ会）

10日間にわたる国際湿地シンポジウム関連イベントが終了した（主催は日本湿地ネットワーク）。スタートは沖縄で、「うまい話にウラがある、埋め立て話にナニがある？」と題して2月22日に現地視察、23日に沖縄大学でシンポジウムを開催した。その後、有明海の視察も行われ、3月1日・2日には福岡で総まとめのシンポジウムと現地視察（国際湿地シンポジウムin福岡「泡瀬・諫早・セマングム」）が開催された。

このシンポジウムは昨年11月、スペインのバレンシアで開かれたラムサール条約第八回締約国会議において、一、国際的な湿地保全の取り組みがさらに大きく前進したこと、二、NGOによるプレ会議において、東アジアの湿地環境を保全する上で、セマングム（注）・諫早・泡瀬を保全することの重要性が特に強調されたこと、の二点を受けて行われた。ここで言う「湿地」とは、淡水・海水に限らず広く水辺環境を指している。

韓国環境運動連合（KFEM）のミョン・ホ（明湖）さんは、ツアー全日程に参加。沖縄でのシンポジウムでは、KFEM作成のセマングム干潟に関するすばらしいビデオを鑑賞した後、ミョン・ホさんの熱のこもった講演を聴くことができた。セマングム地域の水産物は韓国でも有数の生産量を誇っている。しかし韓国政府は日本の諫早湾干拓事業を「手本」として、諫早の11倍・4万haにも及ぶセマングムの海域を全長33キロの潮受け堤防で閉め切り農地をつくる計画を進めている。現在、潮受け堤防はすでに73%まで作られているが、多くの人々がこの干拓に反対し続けている。主な理由は、韓国でも米が生産過剰になっており、新たな水田を必要としないことや、海の閉め切りにより豊かな水産資源が大打撃を受け、特にシナハマグリについては韓国沿岸ではほとんどとれなくなると予測されていることなどがあげられた。干拓事業を中止に追い込むために、これまで思いつく限りの運動を着実に展開してきたし、これからも続けてゆく、と語るミョン・ホさんの顔には自信が満ちあふれていた。

人類学の研究者でもある「セマングム生命学会」のチョ・キョンマン（趙慶萬）教授は福岡のシンポジウムで、セマングム干拓事業の歴史などについても報告。当該事業は、自然環境だけでなく、人々の築きあげてきた文化をも消失させ、韓国の社会や経済などあらゆる方面に悪影響をおよぼす重大事件である、と結んだ。

泡瀬で進められているのは、リゾート開発中心の埋立事業である。けれど、多様で豊かな海の生物たちに支え

られた地域固有の文化が現存し、事業が進めばこれらすべてが失われてしまうこと、そして事業そのものの妥当性に問題があることでは、諫早・セマングムと共通する。また、泡瀬で「環境保全策」として行われている海草の移植が大規模に環境を破壊している現状については、良質な自然の湿地は復元された湿地では置き換えることができない、とする世界の認識と湿地保全の流れに逆行していることなどが改めて指摘された。

泡瀬だけではない。沖縄県内の海辺はいまや瀕死の状態だ。多くの海辺がすでに埋立で失われてしまったが、残された海辺にも次々と「開発計画」があがっている。また、「親水性」や「レクリエーション性」を謳った琉球諸島沿岸海岸保全基本計画では、155カ所もの護岸や人工ビーチの計画案が策定されている。生物の生息環境を大幅に奪う階段護岸や人工ビーチで、本当に海に親しむことができるだろうか？

そして、これらの開発行為は一地域の問題にとどまらない。例えば“キープヤー”は沖縄のどこの海辺でもとれた貝だが、埋立や赤土汚染で現在本島内でまとまった量が採れるのは泡瀬と羽地の干潟のみとなってしまった。現在スーパーでは本土と同じようにアサリやハマグリが大量に売られている。だが、本土でもこれらの貝はほとんど採れなくなっており、大部分は輸入でまかなわれている。とりわけハマグリは、深刻な自然破壊と飢餓で苦しんでいると言われる北朝鮮から大量に輸入しているそうだ。セマングムを失えば、日本人以上に海産物の好きな韓国の人々は、やはり大量に輸入をはじめるだろう。足下の自然を大切にすることは、自分たちの文化や生活を守るだけでなく、遠く離れた地域の自然や人々の生活を守ることにもつながるのである。

シンポジウムでは、三つの地域の事業に象徴される両国の問題には共通点が多いことを認識し、これらの問題を解決するには、さらなる地域間の情報交換が不可欠であることを再確認した。各地域の抱える問題は極めて深刻だが、このシンポジウムを契機に、地域や国の境を超えた新たなネットワークが構築され、人々の交流や連帯はさらに深まっていくだろう、という明るい兆しも感じた。

注：セマングム干潟は韓国西海岸の中ほどに位置し、全羅北道の群山（クンサン）市、金堤（キムジェ）市、扶安（プアン郡）にまたがる干潟で、世界でも屈指の規模と豊かさを誇っている。鳥の渡りのルート上も極めて重要な場所である。

塩屋湾外海埋立て問題の現状

儀保 昇（大宜味を愛さする会）

沖縄中で工事それ自体が目的となってしまう、民意も理もない埋立て事業が進行する中、ここ大宜味村の塩屋湾外海埋立て事業も許認可の最終段階を迎えている。7年くらい前から計画のあったこの事業は、2年前あたりまでは世間の話題にもなっていなかった。村に住む私たちは気にしながらもほとんどあきらめていて、また何よりもめいめいが孤立して静かだったのだ。それが今では騒がしくも楽しい村になっている。この間の成り行きを述べてみたい。

2年前の2001年4月に埋立て事業に関する最後のつものの説明会を行った大宜味村は、その時点では2001年中に県からの認可を受ける予定であった。それが2003年3月現在、未だ許可を得られていない。説明会を機に結成された「大宜味を愛（かな）さする会」の活動の成果であると思う。村は蜂の巣をつついてしまったのだ。村はさらに各字持ち回りで説明会を開き、これで村民の合意形成はできたとして、認可申請の作業を進めていた。各字で提起された多くの疑問に答えることもできないままにである。愛さする会は浜辺の見学会を行い、村長に公開質問状を出し、県の担当課に要請するなどして活動してきた。村はその年内の認可申請はついにできなかった。

2002年になると、村内は村長選と村議選一色になってきた。村議選は照屋林三村長の後継者と前教育長の島袋義久氏との争いとなった。私たちは日頃の島袋氏の言動に一縷の期待を持ち、本人との話し合いを持った上で支持することに決めた。選挙なので単純に埋立て反対とは言えないが、基本的に情報公開と説明責任を果たすことを約束してもらったのである。照屋村長の公共工事の発注のしかたに反発した議員が大挙して島袋氏についたこともあって、結果は島袋氏の圧勝となった。愛さする会も選挙運動に参加し、また独自の集会を持つなどして働いた。

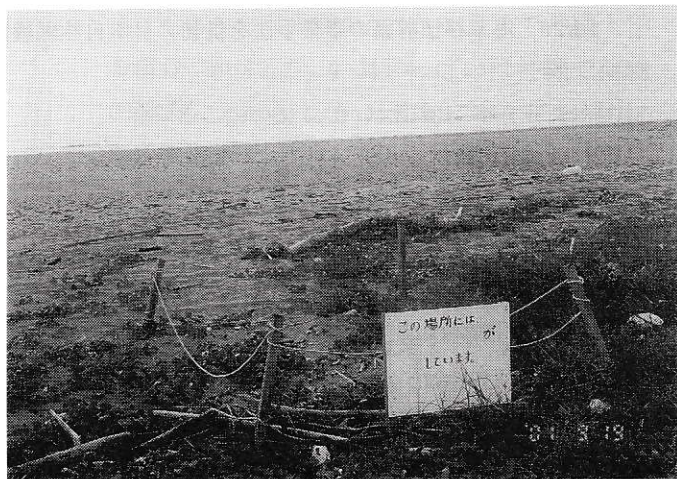
選挙に怪文書はつきものであるが、私たち村外から移ってきた者は相手陣営から「にわか大宜味人」と罵られた。みんなで「にわか大宜味人党」を作ろうかと笑いあったのだが、日頃できるだけなじもうとして、積極的に行事に参加し、部落や学校の役員を引き受け、ボランティアなのもしているのにと寂しくもあった。

村議選は残念なことに埋立て反対の議員は二人落ちて、埋立てについては11対1ということになってしまった。面白いのは、誰も公約というものを出さないことと、自分の支持している候補者が賛成なのか反対なのかわからない村民がかなりいたことである。はっきりと考えを言わず血縁だけが頼みの、まさに田舎選挙そのものであった。

選挙後、説明責任と合意形成を公約にした島袋氏は年内申請を焦る事務方を押し切って、12月18日に最後(?)の説明会を開いた。会の冒頭、地元有力者の「やないチャー（バカな本土出身者）が反対しているだけ」「村民以外の人間と報道はこの場所から出て行け」発言に場内は一時騒然となった。またも本音の発露か。この説明会も結局時間切れとなり、私たちの疑問は解消どころか膨れ上がるばかりだった。しかしながらこれをもって公約を果たしたつもの新村長は、何と2日後に認可申請書を県に提出したのである。二言めには口にする「行政の継続」とは、民意よりも理よりも優先するものなのか。

私たちは民意を問うことにした。先の村議選で候補者たちが自分の考えを支持者にも明らかにせず、に当选していくのを見たからだ。住民投票の意思をマスコミに小出しにしながら、名護や泡瀬の先人たちに教えてもらいつつ準備を進めている。村議全員にも民意を問おうと言う働きかけもした。残念ながら（予想通り）11人は賛同してくれなかった。

そして先日3月11日、認可申請書の公告縦覧が始まった。私たちはこれに対する意見書をまとめながら、住民投票条例制定請求の機をうかがっているところである。



埋立て予定地の海岸。「ウミガメの産卵場所」を示す看板が…。

エコネット

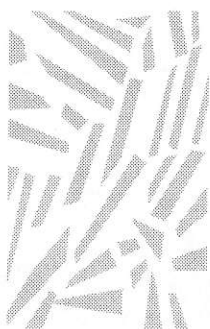
～琉球新報・沖縄タイムスから拾った各地のニュース（2002年12月～2003年2月）～

2002年

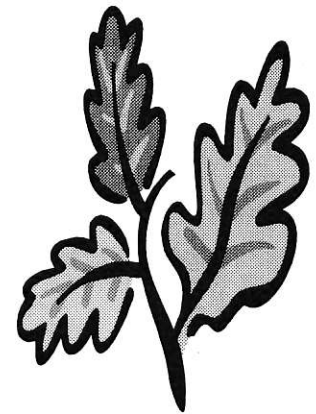
- 12/1 エコツーリズム国際大会、沖縄宣言採択し閉幕
- 12/2 ダイオキシン排出基準強化で離島の8焼却炉廃止
- 12/3 米国防歳出授權法、ジュゴン保護の規定残る
- 12/4 「軍用地料、男性のみは差別」／女性26人が共有権者団体を提訴
- 12/4 具志川署、海兵隊少佐に逮捕状／比女性への暴行未遂容疑
- 12/5 環境監視検討委、今月にも藻場移植／泡瀬地区埋め立て
- 12/5 米軍が伊江島のパラシュート降下訓練を再開
- 12/6 平和市民連絡会が来月、バグダッド入り／イラク攻撃反対で運動
- 12/7 電磁波の影響懸念、住民ら反対運動展開／携帯電話の中継基地建設
- 12/8 那覇市最終処分場、使用延長で年内合意へ
- 12/8 サンゴに原因不明の腫瘍／山城名桜大助教授確認
- 12/9 ラムサール条約NGO会議、決議文に「泡瀬保全」盛り込む
- 12/11 藻場手植え移植を了承／泡瀬埋め立て環境検討委
- 12/11 地位協定の改定訴え、県議会が抗議行動／女性暴行未遂事件
- 12/12 比謝川をそ生させる会が活動記録第3集を発刊
- 12/12 基地内中学校にヘリ着陸、住民びつくりの「課外授業」／キャンプ桑江
- 12/12 南風原町「迷惑料」8000万円提案／那覇市ごみ処分場延長問題
- 12/12 シュワブ沖、本島で最大の藻場／日本自然保護協会が報告書
- 12/13 那覇市長、清算金は同意した額と住民に説明／那覇市のごみ処分場延長問題
- 12/14 米軍水中爆破訓練、沖縄では禁止を／県漁連、県と施設局に要請
- 12/15 多彩な催しを満喫／エコツーリズム、西表で島人文化祭
- 12/17 竹富町長「開発反対なら施設退去」／西表エコ協会に通知
- 12/18 南風原町住民、清算金など7億6800万円申し入れ／最終処分場延長問題
- 12/18 「基地環境」で特別委設置／日米安保協議委
- 12/18 那覇港湾、基地機能強化させぬ／翁長市長が市議会で決意
- 12/20 赤土流出防止に新技術／石垣市で実証実験
- 12/21 大宜味村塩屋湾外海埋め立て、認可求め県に願書
- 12/21 反対派の活動衰退／海上ヘリ基地建設を問う名護市民投票から5年
- 12/21 こんな豊かな海に基地？／名古屋同朋高校が辺野古沖観察
- 12/23 イラク攻撃の中止求め集会／嘉手納基地で市民団体
- 12/24 海草藻場の手植え移植開始／泡瀬埋め立て
- 12/27 世界遺産近くに採石場計画／今帰仁村住民らが反発
- 12/28 ごみ処分場使用、4年間延長で正式合意／那覇市長と南風原町長
- 12/29 自然環境を保全へ、市民団体などで委員会発足／宮古
- 12/29 海草移植計画の事業手法を批判／日本自然保護協会

2003年

- 1/1 エコマネー「ちむ」大好評／那覇市栄町市場
- 1/4 モラルも「ボイ捨て」、依然ごみ散乱／美化条例施行
- 1/6 飛行訓練初日、F15機が緊急着陸／嘉手納基地
- 1/7 日弁連が泡瀬干潟保全で聞き取り、藻場移植に疑問も
- 1/8 在沖海兵隊増強「負担増望ましくない」／基地周辺市町村
- 1/9 日弁連、担当者と意見交換／泡瀬沖合埋め立て
- 1/9 産廃用埋め立て計画を許可せず／東村農業委
- 1/10 那覇市の年間ごみは県庁25杯分、処理費用は28億円
- 1/11 沖縄は排ガス抑制後進県／低公害車普及が最下位
- 1/14 平和市民連絡会がイラクへ出発



- 1/17 米軍PCB、嘉手納から米国に空輸検討
- 1/17 環境マネジメントシステム講座始まる／沖大と京都のNPOが提携
- 1/18 障害者の自立を支援／NPO法人沖縄パソコンリサイクル
- 1/18 県内12海域で魚類ダイオキシン調査を実施／県環境保全課
- 1/18 米軍PCBの空輸開始／相模皮切り、近く沖縄からも
- 1/19 イラク攻撃に抗議、平和市民連絡会が集会／嘉手納基地
- 1/19 移設めぐり活発討議、沖縄大学で基地問題シンポ
- 1/20 廃油利用し燃料開発／沖縄工高工業化学科
- 1/21 ごみ処理迷惑料、糸満市の請求棄却／那覇地裁
- 1/22 「批判で政策変えられる」／宇井沖大教授が最終講義
- 1/22 新石垣空港予定地近くにカグラコウモリ3000頭の洞くつ
- 1/23 辺野古沖、4月から海底調査／普天間移設
- 1/24 「海に基地造らないで」／東京の高校生らが名護市長あて署名
- 1/24 沖大、ネット講義を4月から開始
- 1/25 米軍キャンプ・ハンセンの土地、10万6000平方メートル返還
- 1/25 恩納村の海岸に廃油ボール、7カ所で50キロ回収
- 1/28 塩屋湾外海埋め立て早期認可で意見書可決／大宜味村議会
- 1/28 「創る会」、3174人分の反対署名提出／西表リゾートホテル計画
- 1/30 今帰仁村今泊の採石場計画で、住民らが反対集会
- 1/31 普天間移設、環境アセスで業者と契約



- 2/1 新石垣アセス方法書を討論／白保の海を守る会
- 2/2 在日米基地のPCB、日本製移送も決定
- 2/2 県内全域、不法投棄の一掃へ
- 2/3 嘉手納から派遣のF15、イラク空爆に参加へ
- 2/3 在沖米軍PCB、数カ月中に搬出／川口外相が明言
- 2/4 糸満市、共同ごみ処理迷惑料訴訟で控訴
- 2/5 本島、離島の廃油ボール、成分は同一のC重油
- 2/8 レンジ10射撃訓練、近く再開／米軍「銃固定で安全」
- 2/9 広島・沖美町のNLP誘致撤回／沖縄と重なる現状
- 2/10 嘉手納基地にF15、8機飛来／北朝鮮情勢で配備か
- 2/11 地元住民ら、総合事務局に不許可要請／今帰仁・今泊セメント採掘
- 2/12 廃弾処理で爆音、住民から不安の声／キャンプ・シュワブ
- 2/12 レンジ10訓練再開、名護市議会が抗議決議
- 2/13 埋め立て事業の問題点指摘／泡瀬干潟を考えるシンポ
- 2/13 サンゴ、海藻50ヘクタール消滅／浦添地先埋め立て環境アセス
- 2/15 レンジ10の訓練再開を容認／岡・防衛施設局長
- 2/15 普天間爆音訴訟、国が損害賠償拒否
- 2/15 新ごみ処理施設起工式、06年稼働目指す／南風原町
- 2/17 「レンジ10は欠陥施設」／名護市長、廃止求める
- 2/19 普天間爆音訴訟、原告数400人に倍増
- 2/19 米に普天間代替施設の計画変更要請へ／日本自然保護協会
- 2/19 泡瀬埋め立て保全作業部会、移植現場を視察
- 2/20 貴重種の保護策検討／那覇港管理組合議会
- 2/20 8割の地点で“葉枯れ”／泡瀬埋め立て移植検討部会
- 2/20 知事、県外移転要求も選択肢／レンジ10あす訓練再開
- 2/21 原告「静かな生活返せ」／普天間爆音訴訟の第1回口頭弁論
- 2/21 米海兵隊、レンジ10で演習再開／実弾射撃を強行
- 2/22 在沖米軍、比過激派を直接掃討／沖縄、対テロ戦拠点に
- 2/23 廃車処理、無免許解体業者ら違法管理／県が52業者を指導
- 2/25 米四軍調整官が小・中学校「教壇」へ／知念村長が招請
- 2/26 米四軍調整官学校講演に疑問の声相次ぐ
- 2/26 米四軍調整官の講演中止／知念村長「子供への影響考慮」
- 2/28 絶滅危惧の海草確認／泡瀬埋め立て、総合事務局に中止要請



環境情報おきなわ(2003 年 4 月～2003 年 6 月)

◆ 宇井 純氏講演会

「過去から学ぶ～沖縄の住民運動を通して」

第一部：宇井 純氏講演会

第二部：宇井さんと語る（伊波義安 寺田麗子）

4 月 26 日（土）午後 6 時 30 分～午後 8 時 30 分

場所／沖縄市農民研修センター

入場無料

【問合先】 住民運動連絡会 090-1946-0147（仲西）

◆ ゴミ減量をテーマに無料講座

この 4 月より、那覇市の学校や地域にて、ゴミ減量啓発の無料講座を始めます。詳細は下記リサイクルプラザの宮良までお問い合わせ下さい。

【問合先】：那覇市リサイクルプラザ（アースの会）

TEL 098-889-5396

◆ 新編「消えゆく沖縄の山・海・川」

1996 年に発刊され好評を博した「消えゆく沖縄の山・海・川」の新編がこのほど出版されました。前回から後の公害・環境問題年表も補足されており、今の状況が分かりやすく整理されています。

定価 1500 円。沖縄環境ネットワーク事務局からも郵送します。

【問合先】： 沖縄学版

TEL 098-854-1620

◆ 安謝川をきれいにする首里住民の会

・ 安謝川クリーン大作戦

活動日時：奇数月第 4 土曜日 午前 10 時～12 時

集合場所：末吉公園内 花見橋

軽装、ゴム長靴を用意してご参加ください。

* 詳しい日時は下記にお問い合わせください。

【問い合わせ先】 Tel/Fax098-884-1915 石野桂子



◆ 【書籍販売】 郵送します

◎『沖縄の環境と平和』 価格 1,000 円

◎『低周波音公害調査』報告書 1 部 500 円

◎『沖縄から世界へ』 価格 1,000 円

事務局（098-832-8484）までお問合せ下さい

◆ 沖縄環境ネットワーク世話人会 参加自由です！

日 時：不定（お問合せ下さい）

場 所：沖縄大学 3 号館 402 教室（変更の場合あり）

年会費：個人会員：3,000 円 学生会員：1,500 円

家族会員：3,000 円 団体会員：10,000 円

特別賛助会員：100,000 円

郵便振込先：（口座番号）02010-9-20132

（加入者名）沖縄環境ネットワーク



● 2003 年度沖縄環境ネットワーク総会のお知らせ

沖縄環境ネットワークでは、本年度の総会を下記の日程で開催します。

日時／2003 年 6 月 28 日（土）午後 1 時～6 時

場所／沖縄大学（予定）

次号（6 月中旬発行予定）にて詳細をお伝えします。

○ 事務局移転のお知らせ

沖縄環境ネットワーク事務局は 4 月 1 日より下記に移転しました。ご連絡は下記までお願いいたします。

新事務所…〒902-0075 那覇市国場 512 番地

ワタリアパート 106 号 Tel/Fax098-832-8484

なお、E メールは 4 月 20 日頃の開通予定です。

■ 編集後記

別れと新しい出会いの季節。沖縄環境ネットワークにもその季節が訪れています。宇井先生のご帰郷、事務局の移転など、変化の多い 4 月の始まりとなりました。しかし、沖縄を取り巻く状況は相変わらず厳しいままです。ひとたび戦争が起これば、ここは「静かなる戦場」の様相を呈します。そしてお決まりの「沖縄修学旅行キャンセル」。自らに問われているものの真の意味を素通りしていくばかりの現状が、いつまで続くのでしょうか。前回この欄でお知らせした、宮古島の産業廃棄物処分場火災とその健康被害に関する情報は都合により次号以降に掲載予定です。ご了承下さい。（酒）

沖縄環境ネットワーク通信・第 21 号

2003 年 4 月 10 日発行

発 行 〒902-0075 那覇市国場 512 番地

ワタリアパート 106 号

沖縄環境ネットワーク

TEL/FAX 098-832-8484

E-mail：近日開通予定

発行人 宇井 純 編集 酒井 哲哉

<http://homepage1.nifty.com/okikan/>